

静謐なヒマラヤ・コンデ山群トレッキング

2008年10月 with 潔ちゃん



(コンデ・シェルパ・ピーク山頂からヒマラヤン・ジャイアンツを望む。後列左よりエベレスト、ローツェ、マカルー、カンチェンジュンガ。手前の前衛峰は中央がアマダブラム、右端がタマセルク)

狭い岩山の山頂は、風雨に色褪せたタルチョ（ラマ教の旗）が風に翻っているだけで他には何も無い殺風景な所であった。時折ヒューと強風が舞う以外は物音ひとつせず、何か異次元の空間に落ち込んだような錯覚を覚えた。ここはコンデ山群の前衛峰、標高 4800mのコンデ・シェルパ・ピークの、人がやっと2人だけ座れるような荒れた山頂である。しかし、その殺風景の代わりに神は雄大な眺望を与えてくれた。遮る物も無い天空から北東に目をやると、遙かヒマラヤの連嶺が屏風のように連なっていた。左手最奥チョー・オユーからギャチュン・カン、プモ・リ、サガルマータ（エヴェレスト）、ローツェへと繋がるネパール・チベット国境の障壁の山巔である。その遙か東端には、普通は隠れていて見えないマカルーも真っ白な鋭いピラミッドを天空に突き上げていた。そして手前には、特異な蛸坊主のアマダブラム、秀麗なヒマラヤ壁を纏った貴婦人のタマセルクとカンテガ、どっしりと大きな山容のタボチェやチョラツェなど前衛の山々が大きく見えるのであった。

初めてヒマラヤに接した時、それまで世界最高所のホテルであったエヴェレスト・ビュー・ホテルの前庭から見たサガルマータやローツェの大パノラマには度肝を抜かれたものだったが、ここから見るパノラマはそれに数等優るもので、一度にジャイアンツの両翼まで見渡せる山なみの広がりやをいつまでもボーと飽きずに眺めていた。足元をネズミくらいの小動物が跳ねて行った物音で我に返った。山頂にはただ冷たい風が吹いているだけだった。



(シェルパ・ピーク 4800m 山頂にて)

旧知のネパールのエージェントの社長（HAS 社、Phurba Gyartzen Sherpa）から、新しくコンデリ山麓にホテルを開業したので来ないかと誘いを受けた。エヴェレスト・ビュー・ホテルより300m高所の、ナムチェバザールのポーテコシ川対岸の丘陵に位置する標高4200mのホテル（コンデ・ホテル）である。ナムチェからもその赤い屋根が点のように小さく見える。トレッキング・ルートも彼が新しく開発したもので、登山基地ルクラから出発してナムチェ、ターメ経由でそのホテルまで登り、下山は別なルートで同じルクラに戻って来る回遊コースで、彼はコンデ・サーキットと名付けていた。サーキットと言え、昨年訪れた1ヶ月間を要するアンナプルナ・サーキットが有名であるが、彼も小型ながらその鑿（ひそみ）に倣（なら）ったのかもしれない。

エヴェレスト街道周辺のトレッキングコースは、カラパタールやゴークョなどに代表されるピストン・コースが多いが、このコースは往復別々なルートを辿るので興味深い。それにヒマラヤ・ジャイアンツの眺望がエヴェレスト・ビュー・ホテルより素晴らしいとくれば、これはもう行って見ない手はないではないか。シリウスの面々にも声を掛けてみたが、皆さん曰く「もうヒマラヤは飽きたよ」。幸い、リタイアしてから山を始めた大学時代からの友人「潔ちゃん」を誘って見たら飛びついてきたので、トレッキング終了後に引き続き単独で予定していたキャブ・リ峰登攀のための高度順応も兼ねて2人で弥次喜多道中に出掛けた次第である。



（コンデホテルから後方のコンデ・リ峰（6186m、右）、ヌプラ峰（5885m、左）を望む。HSA 社長ご夫妻と）

このトレッキングは、ルクラ～パクディン～ナムチェ～ターメ～コンデ～パクディン～ルクラと周遊する10日間程（日本起点で勘定すると約2週間）のコースで、途中の泊りは全てロッジではなくホテルにしたから、シュラフなどの荷物は不要で荷は軽い。そのため、今回はガイドやポーターは予約しなかった。ホテルはそれぞれの集落の最高級ホテル、食事も毎夜ステーキなどだったから結構なモノだった（その分経費がかなり高くついて、帰国してからはヒモジイ毎日となった）。

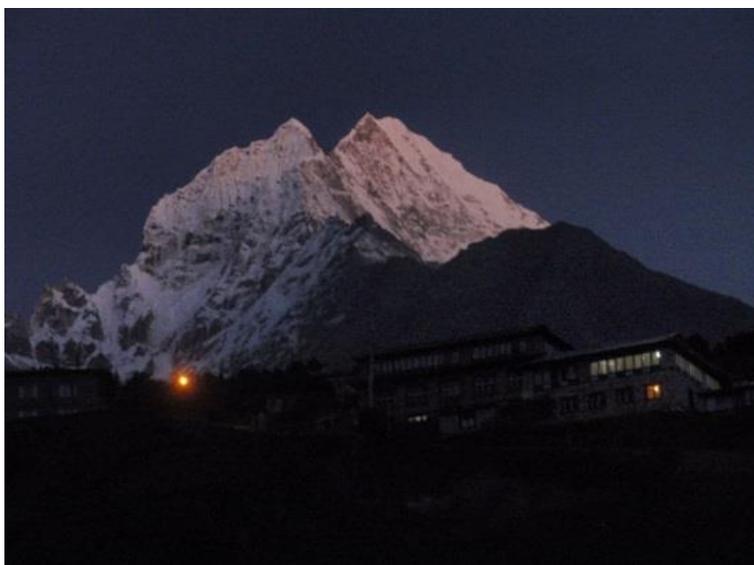
日本出発の1週間前に、カトマンズから登山基地のルクラ空港行の国内線が着陸に失敗して炎上、乗員・乗客18名が死亡したとのニュースが流れた。これはエライことになったなア～、事故機は我々が乗る予定の Yeti Airlines であるから、カトマンズ到着早々ルクラ便のエアラインを変えてもらわなければならないと気を揉みながら出国した。航空機事故は続けて起こるといふジンクスがあるではないか。それに加えて私は大の飛行機嫌いである。大型ジェット旅客機でも、離陸してから着陸するまでシートベルトを股に食い込ませるぐらいギューギューに締め付け通しで、両腕でアームレストを抱き抱えて直立不動の姿勢で身動きもできないくらい緊張するのである。エアラインを変更してくれるように、カトマンズに着いて直ぐにエージェントの Phurba 社長に頼んでみたのだが、彼は「アア、No problem. 事故が起キル場合ハ、何処ノ航空会社デモ同じダヨ。ソレニ、ルクラ便ハ何時モ満席ダカラネ。他ノ会社ノ航空券モ取レナイヨ」と気にとめる様子もない。

ルクラ便は20人乗りのオンボロ小型プロペラ機で、しかも狭い谷間を飛行するので随分揺れる。今までもそうであったが、今回は事故があった直後だから余計に緊張して全く生きた心地がしなかった。

パクディンでは、集落の入り口にある Yeti Mountain Home, Phakdhing に泊った。ここは見栄えが立派なホテルで、今まで安ロッジ泊専門の小生もいつかはこのような高級ホテルに泊りたいものと、側を通る度に羨ましがっていたものだった。ここは昨年までは Phakrapa Resort という名前であったが、Yeti Airlines Group に身売りして名前も変わっていた。しかし、見栄えの立派さに比べて、客は我々のみ。客が居ないためか湯も出ず、また湯が出たと思えば今度は水が止まる始末。可愛い女の子のスタッフの愛嬌が唯一の救いというホテルであった。帰途にも一泊したが、その時も客は我々だけ。Yeti 本社からスタッフが出張して来ていて、ホテル従業員の指導をしていた。ネパール語でやっていたので、何を言っているのかは定かではなかったが、思うに、お前達のやり方が悪いから客が来ないのだとイジメているようだった。もしそうならこれは本末転倒で、本社の集客企画力がサッパリであることを自分で証明しているようなものではないか。

翌日はモンジョ泊まりの超ゆっくりコース。翌々日のナムチェではクーンブ・ロッジに泊った。カーター元米大統領夫妻も泊ったロッジであるが、設備はイマイチ。オーナーの若旦那とは顔見知りなので愛想は良いのだが、商売気にも富んでいる。ここに2泊してシャンボチェまで足を伸ばして高度順化を行なった。潔ちゃんも元気で、初めて見るヒマラヤの屋根が気に入ったようだ。

此処から先は荷物も自分達で担いでターメに向った。ナムチェに泊ったトレッカーの殆どがゴーキョ方面やタンボチェ・カラパタール方面に向うので、ここからターメ方面に向う人は少ない。途中で会ったトレッカーは、フルバが招いて引率していたドイツ人エージェントの社長3人だけで、他は地元の住民かチベットからのヤク連れの商人、僧侶達だけであった。ナムチェの上の急峻な丘を越えると道はボーテコシ川に沿った緩やかな道となる。ヒマラヤ特有の埃っぽい砂道もあるが、途中には樹林帯の落ち着いたプロムナードも



(タマセルク残照。ナムチェバザール)

あって心が和んだ。丁度上高地から横尾までのような按配。ただ、ナムチェ～ターメ間は谷沿いの道だから山の眺めは良くない。僅かにパルチャモ峰の頭が見える程度である。

この道はチベットとネパールの交易路になっていて交易品を背負わされたヤクが行列をなしていた。この交易品はナムチェのチベタン・マーケット（ナムチェの広場で年中開かれている）まで運ばれ、ネパールやインドに売られる。主に中国製の衣料品、日用品、履物、オモチャ、食品など。値段は日本の1/10～1/20くらいであろうか。チベットからのヤクの商隊は1週間ほど野宿しながらナムチェまで来るのだそうだ。ヤクの行列と出会う度に道端に避けねばならないので歩が進まない。ターメまでは予定時間の倍くらい掛かった。それにいくら荷が軽いとは言え、10日分の荷物は結構重い。途中でヤクの通過待ちと称してビールを飲んだりしながらダラダラ・ジュルジュルと歩いて行った。ターメの手前でボーテコシ川を渡り、急斜面を巻き上げた上のモレーン末端にターメの集落があるのだが、この急坂でへばってしまって座り込んだら立ち上がれなくなって暫く蹲っていたら、上から誰か人が降りて来るのが見えた。我々が来ることを知らされていた前述のガイド、パサン・シェルパが、余りに到着が遅いと迎えに来てくれたのであった。ああ、助かった。彼は我々2人のザックを背負ってくれた。彼はドイツのエージェントの社長達をコンデに案内するために一足早くターメに来ていたのである。この旅では、道々旧知のガイドやコックやポーター達に偶々会うことが出来て懐かしかった。彼等は

ちゃんと「ご主人」の顔と名前を覚えてくれていて、向こうから声を掛けてくれた。私はトレッキングや登山自体にも増して、現地の人々との交流を重んずる口であるから、このような彼らのホスピタリティーには涙が出てくるのである（マ、老人になって単に涙腺のゴムが緩んできただけのことも知れないが・・・）。

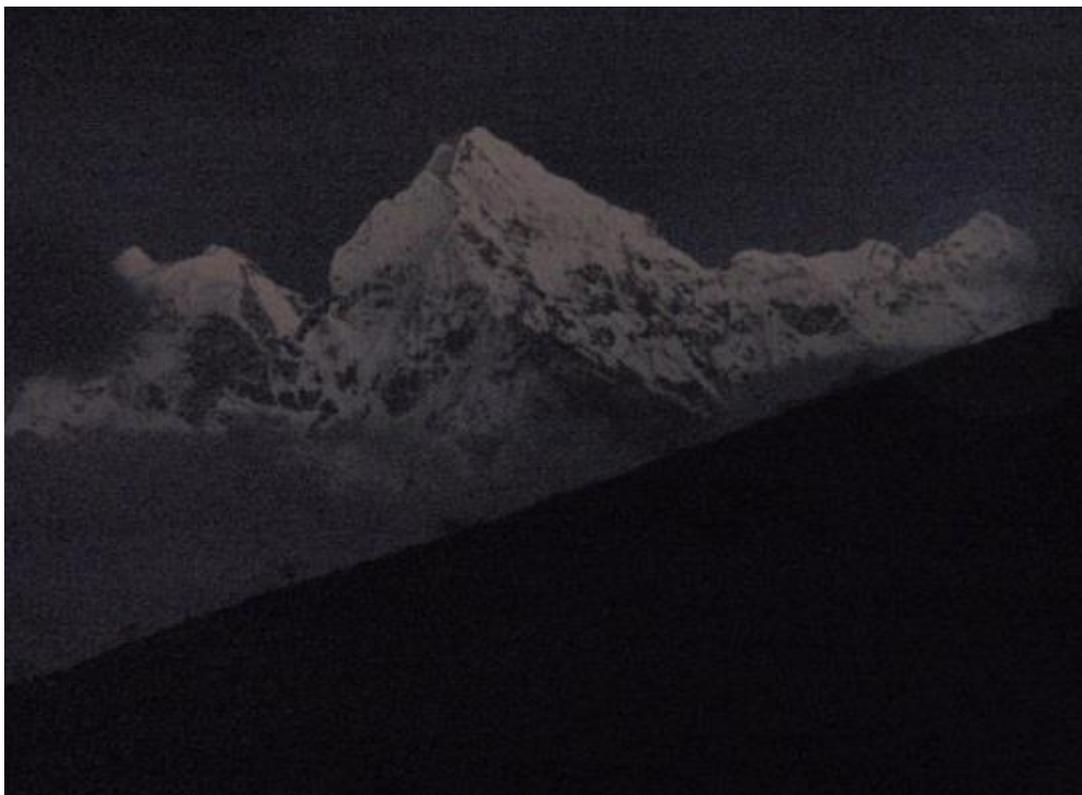
ターメではイエティー・マウンティン・ホーム・ターメというホテルに泊った。^{くだん}件のルクラで墜落事故を起こしたエアラインが経営するリゾートホテルである。部屋にはガスストーブも入っていて、パクディンの同系列のホテルより設備は良かった。広いダイニングルームは客も少なく少し寒かったが、ビールを飲みながらビーフ・シツラー（垂らされたラム酒がパッと炎を上げながら出てくるワンプレート肉料理）を喰った。ビーフは確かにビーフではあったが硬くてどうやらヤクかバッファローがお役目を終えてからの老肉らしい。夜、庭に出てみると漆喰のボーテコシ谷の向こうにタマセルクとカンテガの秀麗な峰々が月明かりに白々と輝いていた。



（ターメ橋手前の岩壁に描かれた仏画。人物は仏法の守護神・金毘羅神が姿を変えて垂迹した潔・金毘羅大権現）



（ターメで泊まったホテル。バックの雪山は、左：テンカンポチェ 6500m、右奥：パルチャモ 6273m）



（漆喰の闇夜の月光に浮かぶタカセルク峰 6618m（中央）とカンテガ峰 6783m（左奥））

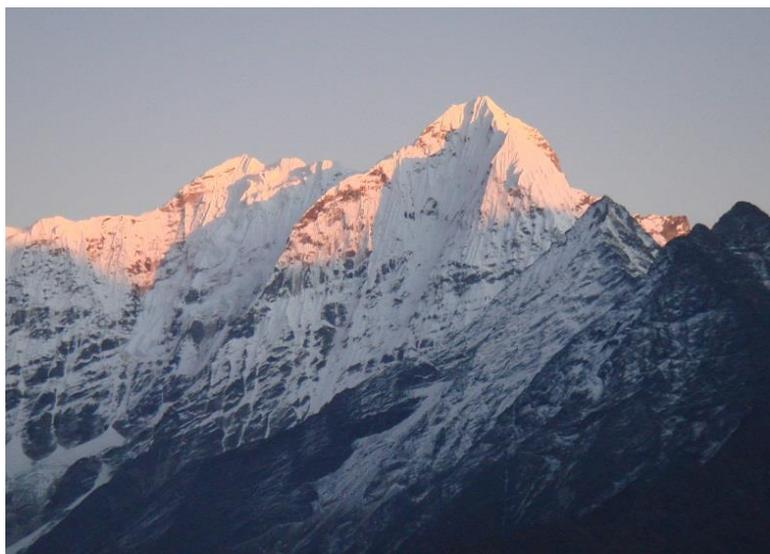
ターメからコンデ迄はいよいよこのトレックの核心部である。ターメのモレーンを 300mほど下ってボーテコシ川の河床に下ると小さな集落があった。ナムチェからターメ迄の道(ボーテコシ左岸)は処々に集落がある大街道であるが、この右岸はここが最後の集落でここからはコンデ山群の山腹を巻いて行く深い山道に分け入ることになる。

山道と言っても、ヤクや獣の踏み跡程度の獣道でアップダウンが激しく、岩場の通過もあって気が抜けない。サルオガセなどが垂れ下がったヒマラヤ松や白樺の巨樹が鬱蒼と茂った樹林帯もあって、なかなかバラエティーに富んだルートであった。目を上げればボーテコシ川の対岸にはいつもタマセルク峰、カンテガ峰やクスムカングル峰のヒマラヤ壁が陽光に輝いていた。

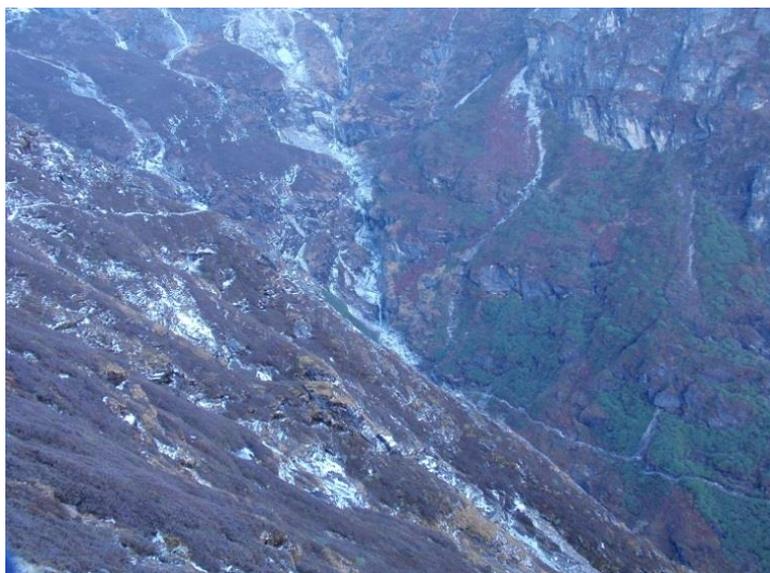
このルートは新たに開発されたもので訪れるトレッカーは未だ少なく、今回も道中誰にも会わなかった。エヴェレスト街道周辺のトレッキングコースが蟻の行列なのに比べて、全く静謐な山中であった。

ルートはやがてボーテコシの支流、サルテマ・コーラの懸崖を大きく迂回する道となった。標高 3900m 辺りのドンヅマリの岩場でこの谷を渡るのであるが、残雪が凍っていて肝を冷やした。足下は断崖絶壁。足を滑らせれば体が木っ端微塵になること必定。

このトレッキングルートには雪はないという前提で来たので、靴はズックに毛が生えた程度のシロモノ、軽アイゼンは持って来たが、履くのも面倒だ。うまい具合に、道の改修に来ていたコンデ・ホテルのスタッフが引っ張り上げてくれた。彼等はゴム草履であるが氷の上でも平気の平左であった。流石地元民は違うなア〜。また、前々回のイムジャツェ遠征でコックをやってくれたニーマ・ゴパル・シェルパが暖かい紅茶とビスケットを持って迎えに来てくれていた。聞けば、彼は今はこのコンデ・ホテルのコックをやっていて、自宅もホテルのすぐ近くにあるのだそう。



(対岸のマセルク峰(右、6618m)、カンテガ峰(左、6783m)が朝日に輝き始めた)



(サルテマ・コーラのドン詰り。左に山道が見えるが雪で凍っている)



(山道の改修現場で紅茶を飲んでホッと一息)

ここからは、再びコンデ山群の広大な山腹を巻いて行くのだが、陽も落ちて寒くなって来るし空気も薄くなって来るし道のりも結構長いので、再びバテの助三五郎と相成り、ホテルのスタッフにザックを担いで貰った。彼等は「ほれ、あそこにホテルの赤い屋根が見えるだろう、もうすぐだよ」というのだが、これが歩けど歩けど近づかないのだ。やっとの思いでコンデ・ホテルに辿り着いた。

ホテルの女社長（実はフルバ社長の奥さん）とスタッフが出迎えてくれて、暖かいチャイを持って来てくれた。玄関の椅子に足を放り出して草臥れていると、靴も脱がせてくれた。序にナニの面倒までは見てくれなかったが……。玄関のドアの両端にはカトマンズからヘリで空輸した南国の花が水盆に浮かべてあった。心憎い気配りである。（マ、自慢ではないが、小生はこのエージェントの常連であり日本ではこのエージェントのクチコミ・プロモーターでもあるからして、社長曰く“special customer”なのだそう）。早速、ストーブが赫々と燃えるダイニングホールに入って、取り敢えずはビールで乾杯。special customer だからビールも女社長カンチの奢り。



ここからの眺望は冒頭に書いたとおりである。暮れなずむ窓から眺めるとサガルマータとローツェ、その前衛のアマダブラム、タマセルク、カンテガ、クスムカングルの峰々が残照に輝いていた。残照はヒマラヤ襞の陰翳を真っ赤に染めながら中腹から山頂まで一気に駆け上がってゆく。天辺その一点だけが紅に染まった後は、やがて空は淡いピンク色から薄墨に沈潜してゆき、満天の星が輝き始めた。ビール片手に至福のひと時。この天空のショーはたった5分間くらいで終わった。後は漆喰の闇夜。

ダイニングホールでは、標高 4200mの山上の大ダンスパーティーが始まった。ホステス役は女社長である。ドイツ旅行社の社長3人をこのホテルに招待して登って来たフルバ社長も接待で大童。彼等は年間800人ほどのドイツ人トレッカーをこのエージェントに送り込んでいる大顧客である。ビールやワインがジャンジャン出てきた。ビールやワインなどは、ホテルの直ぐ上にある専用のヘリポートまでヘリで空輸するのだそう。専用のヘリポートとは言っても、猫の額ほどの平地に風見旗を立てただけの裸地であったが……。チークダンスしか知らない小生は専らアルコールの費消に専念したものだ。



このコンデ・ホテルの隣には、イエティー・グループ経営の別のホテルが建っていた。前述のパクデインのホテルと同様、客も少ないらしい。ヨーロッパ人夫妻が、そこは寒くて仕方がないのでストーブに当たらせてくれとコンデ・ホテルに逃げてきた。客が少ないのでストーブも焚いていないようだ。この辺りの土地はフルバが所有しているのであるが、イエティーに頼まれて割譲してやったのだそう。

このホテルは、コンデ山群の盟主コンデ・リ峰（「悪魔の山」の意、6186m）とヌプラ峰（5873m）を背負った山腹の中段に建っている。これらの峰々は氷に覆われた岩山で太陽を受けてテラテラと光っていた。ここに3日間滞在して、コンデ山群の前衛峰パラック・ピークとシェルパ・ピーク（いずれも4800m程度）を往復してきた。それぞれホテルから往復5時間程度の“コブ”であったが結構キツイ登りで、道も無いのでゴロタ石を避けながら適当に斜面を選んで登って行ったが、荒れた急傾斜地に生えた短い草本は結構滑った。シェルパ・ピークの山頂は人2人がやっと座れる程度の狭い岩山であったが、ヒマラヤジャイアンツが一望できる360度遮るものが無い素晴らしい展望台であったことは冒頭に書いたとおりである。



(シェルパ・ピーク付近からドゥドウ溪谷越しにエベレスト、ローツェ、アムダブラム。手前右はタマセルク峰。右の赤い屋根がコンデ・ホテル)



(同じく、ナムチェバザールを俯瞰。盆地の上はシャンボチェ空港の滑走路、右上はチョルクンと軍の駐屯地)



(手前左の前衛峰はアラカムツェ、チョラツェ、タボチェ。手前の集落はナムチェ・バザール)



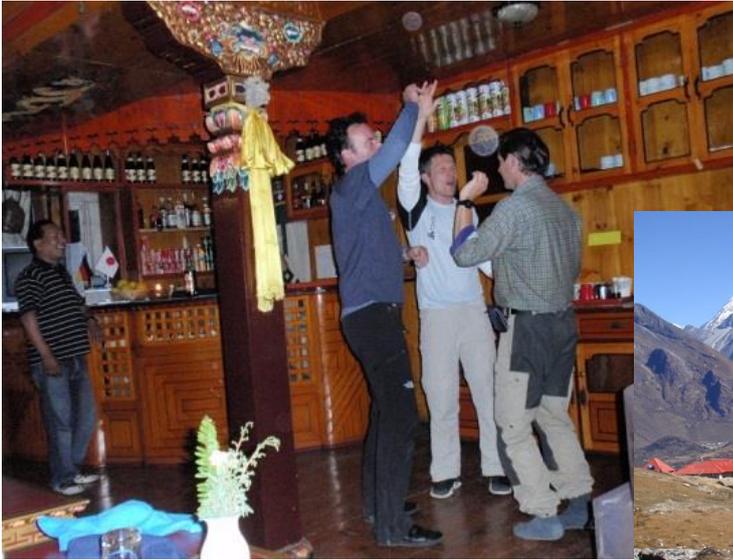
(シェルパ・ピーク頂上から辿って来たサステマ・コーラを俯瞰。右奥に見える谷の集落はポーテコシ川対岸のターモ集落)

このシェルパ・ピークのすぐ上にはコンデ氷河湖があった。湖というより小さな池程度のモノであったが、確かにモレーンの上に乗った氷河湖であった。この氷河湖は所謂“reflection lake”である。この時は湖面が氷結していて、湖面に映った逆さヒマラヤは見る事ができなかったが、風波が静穏な日には下右のような大パノラマが見えるのだそう(カンチ夫人撮影)。



ホテルからの下山は、タマセルクやカンテガやクスムカングルを始終左手に見ながらののびやかな雲上の散歩となった。途中断崖絶壁を巻く所もあってバラエティーに富んでいる。ドゥドウコシ川の谷間にモンジョやパクディンやルクラの村々が遥か下方に望める雄大な眺めの道でもあった。もう下る一方だし、時間もたっぷりあるので、ゆっくりと最後の眺望を楽しみながら麓のパクディンのホテルに旅装

を解いて10日間のトレッキングに終止符を打ったのであった。



(踊りに興じるドイツのエージェント社長の3人。左端はフルバ社長。カウンターには今晚の賓客であるドイツと日本の国旗が掲げられていた)



(雲が湧く雲上の楽園 コンデ・ホテル (右側)) ⇒



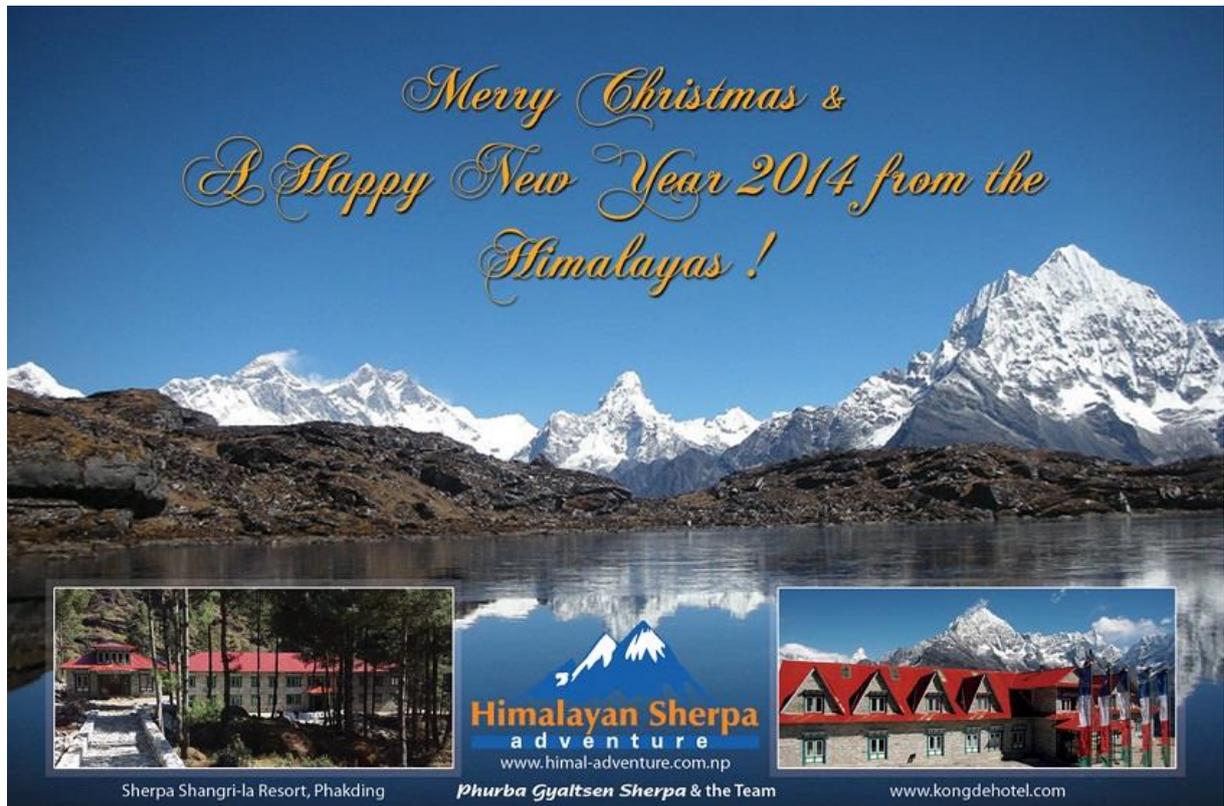
(コンデから麓のトクトク集落へ下る山道。断崖絶壁をトラバースする箇所もあった)



降り着いたトクトクの集落。
右奥のピラミッドの向こう側が
コンデ・ホテル。
コンデからトクトクへの下り道は
この岩山の中腹を右から左にトラ
バースして付けてあり、最後は
手前の樹木の尾根を下って、
下中央の水力発電のパイプラインの橋に出る。

(補記)

- ①上記下山路の途中には“Japanese Camp”と称されている猫の額程度の台地がある。テントが3張程度設営できる。女社長の話では、コンデ・ホテルからここまでテント、寝袋、食料、水など一切切切をポーターとコックに持たせることも出来るそうで、ナムチェやターメを迂回せずパクディンの先のトクトクから直接このJapanese Campを経由してコンデに登れば、トレッキングの日程をかなり短縮できそうだ。ただし、トクトクとコンデ間は標高差が1400mくらいあるので、Japanese Campに1~2日間ほど滞在して高度順化する必要があるだろう。
- ②ターメからコンデ・ホテルまで10時間以上掛かった。上述の凍り道を避けて時間も短縮できる新しい道の付け替えが2009年春に終わったので、時間も7時間くらいに短縮できるとの現地からの知らせを後日貰った。翌年も日本山岳会の会員10人を同じコースでコンデ・ホテルに案内したが、サルテマ・コーラのドンヅマリの懸崖の上の凍っていた道が付け替えられて乾いた道になっていた。ただ、その他は以前と同じ道なので、時間の短縮はあまり期待できない。
- ③フルバ社長は、その後パクディンにも自前のホテルを建設した。「シェルパ・シャングリラ・リゾート パクディン」という。新しいホテルの写真が入ったクリスマスカードを送ってきた(2014 X'mas)。パクディンまでなら歳を取っても歩けるだろうから、彼のこの新しいリゾートホテルにも泊まってみたいものである。



(背景はコンデ氷河湖に映る逆さヒマラヤの峰々)

(本稿 完)

⇒ [「遥かな山々 私の山旅・海外編」目次に戻る](#)